

小西甚一著「古文の読解」<sup>こぶん どっかい</sup>ちくま学芸文庫、筑摩書房 2010年2月10日刊を読む

## 芭蕉の「不易流行説」とは

1. (1)簡単に考えると、「不易」と「流行」は、反対のように見えやすい。一時的な流行の作品といつまでも変わらずに存在する不易の作品とは、火と水くらいの違いがありそうに思われる。しかし、芭蕉によれば、両者はもともと同一源から生まれるものだという。  
(2)つまり、真剣な創作態度から、やむにやまれず新しい世界へふみ出すところに「流行の作品」が生まれるが、何分にも未知の境へ進むのだから、きっと成功するとは限らない。一時的にもてはやされても、結局は失敗し消えてゆく作品がむしろ多いだろう。  
(3)が、なかには、つよく人の心をうち、後の世までも残る作品が、ときどき出る。それが不易の作品なのである。
2. (1)すなわち、「不易の作品」も、生まれた瞬間は流行の作品だったのである。  
(2)別の面から言いなおすと、「不易の作品」を生み出そうと思って、人麻呂や定家の歌をまねたところで、けっして「不易の作品」は生まれるものではない。  
(3)「不易の作品」を生むためには、ほんとうの流行に全身を打ちこまなくてはならない。流行に深まるほか、不易に到達する道はない――。
3. (1)これが芭蕉の有名な不易流行説である。すばらしい論である。  
(2)これだけの芸術論は、西洋にもザラにはない。しかも、芭蕉は、それを理論として頭からひねり出したのではなく、身をもって創作の世界で実践し、実践のうちからつかみとったことを述べたにすぎない。  
(3)芭蕉がどんなに「流行」へ激しく体あたりしていったか、すぐのみこめよう。そうして、その「流行」のうちから、わたくしたちを今なお深く感動させずにはおかない幾多の不易なる句が生まれたのである。

P152 ~ 153

## <コメント>

高校生用の古文参考書の中で、文字通り「不易流行」の作品が、この小西先生の「古文の読解」。高校生はもちろん、国語を小学生・中学生・高校生に教えるすべての先生の必読書。

2020年7月9日(木)